

中学校第2学年 国語科 学習指導案

奈良教育大学大学院 修士課程
伝統文化教育・国際理解教育専攻 1 回生
241703 太田遥

1. 単元名 「方言と共通語」 「ありがとうパズルをつくろう！」

2. 単元の目標

- 共通語と方言の特徴や役割について理解し、パズルをつくることのできる (知識・技能)
- 共通語や方言について調べ、地域性と共に考えることでその共通点や相違点について考えたり、考えたことをまとめたり、伝えたりできる (思考・判断・表現)
- 方言を守ろうという意識を持ち、意欲的に共通語や方言について調べ、パズルを作成することができる (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元の設定理由

(1) 生徒観

本学級の生徒は第1学年において「方言と共通語」の単元の導入部分を学んできている。第1学年では、地域ごとに言葉の差異があり、それが方言であることや地理的要因に寄らない社会方言があることを学んでいる。その上で第2学年では、方言についてその特徴や地域ごとの差異がどのようなものであるか、またその良さ（聞き取ることができる・意味が伝わる人同士でのみ得られる一体感や連帯感に由来する「温かみ」「柔らかさ」、イントネーションの違いによる「気持ちのこめやすさ」「自己表現のしやすさ」など）と今日に至るまで残っている理由について学び考えることで、一つの文化として方言を大切にしていきたいという思いを育てたい。

(2) 教材観

本単元では「ありがとうパズル」づくりを題材として取り上げる。日本にある方言について調べ、共通語と方言や方言同士の比較、ゲストティーチャーとの関わりを通して、方言ひいては日本語の価値をより幅広く多様なものとして捉え直すことが期待できる。さらには、グループでのパズル制作活動を通してクラスの仲間とのコミュニケーションや、全員で1つのパズルを制作する活動を通してコミュニケーション能力や協調性の向上も図ることができる。また、日本地図と併せて地域性ととともに学ぶことで、教科横断的な学びも期待できる。

(3) 指導観

本単元の指導に当たっては、まず「方言ラジオ体操」を提示する。これにより、方言は多様であり、同じ国や地域の間でも言葉が通じないことがあるということや標準語の必要性に気づかせる。それをもとに、ゲストティーチャーとの関わりを通して、方言

のもつ良さや今日に至るまで一文化として残っている理由について考え話し合い、方言ひいては日本語について捉え直しをさせたい。また、共通語との TP0 に応じた使い分けの重要性に気づかせ、方言と共通語の使い分けを適切に行うことができるようにさせたい。そして、「ありがとう」という言葉に絞って各地の方言を調べ、全員で1つのパズル制作をすることで、方言が多様であり、地域に根ざしたものであることを視覚的に再認識させる。完成したパズルをもとに各地の「ありがとう」をもちいてコミュニケーション活動をすることで、方言を使う良さを実感させたい。このような活動を通して、関心・意欲とともに方言の良さである柔らかさや温かみを実感させ、一文化として方言を大切にしていきたいという思いを育てたい。

(4)ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

多様性…方言は多種多様であるということ

相互性…方言には共通点や規則性があるということ

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

クリティカル・シンキング…方言がなぜ今日に至るまで残っている理由について考える。

また、方言の良さや多様さを知ることによって日本語という1つ言語の中にも多様な種類があることを再認識し、共通語との使い分けについて考える。

多面的・多角的に考える力…方言のもつ良さについて幅広い視点で考える。また、同じ日本語というくくりの中において、方言の共通点・相違点から規則性を見つける。また、それが地域性ともかかわりがあることに気づく。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

人権・文化を尊重する(文化多様性の尊重)

・達成が期待される SDG s

目標4：教育

4. 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
① 共通語と方言の特徴や役割について理解している。 ② 共通語や方言について調べた知識を関連づけながらまとめたり、伝えたりする技能を身につけている。	① 方言や共通語について調べ、その特徴や役割を地域性と共に考えている。 ② 共通語や方言について調べたことや学んだことをもとに、考えたことをまとめたり、伝えたりしている。	方言を守ろうという意識を持ち、意欲的に共通語や方言について調べ、パズルを作成しようとしている。

5. 単元の指導計画(全5時間)

時間	学習活動・内容	学習への支援	評価・備考
第1時	1. 「方言ラジオ体操」を聞く 2. 方言について調べる	○「方言ラジオ体操」を3種類(アイヌ語、琉球弁、関西弁)聞き、比較を通してそのイメージや共通点・相違点について話し合わせることで、同じ日本語でも大きな違いがあることや聞き取れないものすらあることに気づかせる。 ○身近な関西弁や大和弁を取り上げ、コミュニティ外の人や、同じコミュニティ内ですら通じないことがあるということに気づかせる。また、それによって共通語の必要性に気づかせる。	ウ ワークシート ア①、イ① ワークシート
第2時	3. 大和弁を使っているゲストティーチャーを招き、その暮らしや方言についてお話を聞き、方言がなぜ今も残っているのか考える	○方言を使っている人の中に普段か「方言を守ろう」「残そう」という意識があるわけではないということに気づかせる。その上で、方言は使うことで自然と今日まで残っていること、話者が少なくなっているからこそ絶滅の危機にあることに気づかせる。 ○残そうとしているわけではない中で、なぜ今日まで残っているのか考えさせることで、聞き取ることができる・意味が伝わる人同士でのみ得られる一体感や連帯感に由来する「温かみ」「柔らかさ」、イントネーションの違いによる「気持ちのこめやすさ」「自己表現のしやすさ」といったような方言の良さについて考えさせる。 ○方言と共通語のTPOに応じた使い分けの重要性に気づかせる。	イ①② ワークシート

第 3 4 5 時	5. 方言の「ありがとう」を調べる	○各グループ1 地域担当させ、その地域及び都道府県の「ありがとう」を調べさせる。	ア②、ウ パズル
	6 「ありがとうパズル」をつくる	○調べたものを持ち寄り、みんなで1 つそのクラス独自の「ありがとう」パズルを作成させる。 ○一例であり、同じ県でも言い方は一つではないということにも触れる。	ウ パズル
	7. 「ありがとう」をつかう	○自分たちが担当した地域やその他の地域の方言の「ありがとう」を用いたコミュニケーションを行わせ、方言を実際に用いる良さ(温かみや柔らかさ)を体感させる。	ウ コメント